

ラクゴ・ザ・フューチャー
第七十回… 七十回記念・
「新世界」探訪（その1）

文… 田中啓文

またまたレトロブームだそうで、マンガを見ても、手塚治虫マガジンの釣りキチ三平だのあしたのジョーだの飛雄馬だの奇面組だの、昔のやつばかりだし、テレビを見ていても、アトムだ仮面ライダーだガンダムだ砂の器だ白い巨塔だエースをねらえだと、リバイバルものばかりである。

こうリバイバルものが多いと、生き残るのはたいへんだ。リバイバルのサバイバルであるが、つつい私もそういった番組を見てしまうのはうかうかと作戦に乗せられているのだから。てなわけで、こないだガンダムを見ていると黄色いザクが街で大暴れしている場面があつて、思わず歌ってしまった。

「黄色いザク、乱暴」

うーん、いまいちか。

黄色つながりでもう一つ。

信号が青なので渡ろうとしたら、急に黄色になってしまったので、思わず歌ってしまった。

「黄色、黄色になるとき、あつあー、それは今」

うーん、もつといまいちか。

マンガやアニメだけでなく、歌謡曲（古い言い方）もサバイバル……じゃないリバイバルブームで、古い曲のリメイクがはやっているようだ（この話題、ちょっとまえの回でも書いたような気がするが、気にしない木に竹刀）。いろんな歌手が昔のヒット曲を歌っている。たいがいは、16ビートにしたり、フランクにしたりとビートをいじったり、あちこち変

なアレンジをほどこしたりしているが、たいがい「前のやつ
のほうがよかった」という印象を抱く場合が多い。なかには
微妙に歌詞まで変えているものもある。「異邦人」なんかは、
「ちよつと擦り剥いて、『痛っ!』だけの未亡人」という、
「うっかり未亡人の怪我」がテーマの歌詞になっていたし、
「いい日旅立ち」なんかは、「ああ、日本の銅、高価に!」と
いう、日本の銅相場の値上がりを憂う歌詞に変えられていた。
えーと……嘘ですよ。たまに信じる人がいるからな。

しかし、「ブルーライト・ヨコハマ」だけは、聴いていて
すぐくしくりいくのはなんでだろうと思っていたが、その
謎がとけた。「てるてる家族」の挿入歌なので、レトロな
アレンジを変えられないのである。今回、聴き直してみたが、
なかなかよい。「足音だけがついてくるのよ横浜……」という
箇所などは、つい「べとべとさん、先へおこし」と言ってい
まいそうである。

リメイクといえば、過去何遍も何遍も何遍も何遍も
リメイクされた「新選組」がNHKでまたリメイクされ、
たいへん人気があるらしい。新選組に関する幕末のあるエピ
ソードを紹介しよう。イギリスからジョン・マッカレーとい
う軍人が来日したが、新選組の襲撃をおそれて、勝海舟が自
分の屋敷に泊めることになった。

「ミスター勝。日本の家屋、最高ですな。とくに庭がすばら
しい。イギリス庭園にも負けないです。いったい、あの庭に
植えられた植物は何なんです?」

とたずねられたので、勝海舟曰く、

「そうお褒めいただきと赤面いたす。あれは、長芋と申すもの
にて、観賞用にあらず。摺りおろして、飯にかけて食します」
と答えるとマッカレーは非常に驚いたという。当時のイギ
リスには、長芋を庭に植える習慣がなかったらしい。このエ

ピソードから、「長芋の庭、マツカレイよ」ということわざができたというのが真偽のほどはわからない。

これも、幕末の話だが、新選組と勤王の志士が京都の町なかで斬り合いになり、それに商家の丁稚が巻き込まれてしまった。丁稚は、新選組と勤王の志士の血をあたまから浴びて、まるで血の風呂に入ったみたいに全身真っ赤になってしまったという。このエピソードから、「血で丁稚を洗う」ということわざができたというのが真偽のほどはわからない。

というような小ネタはこのへんまでにして、そろそろ本題に入りたい。

先日、ある用事のために、久々に新世界にいった。新世界……わかりますか？ 大阪のディープサウスにある歓楽街（？）である。私は、じつはこの生まれで、二十歳ぐらいまで住んでいたが、なかなか、その……えぐい街である。そこらじゅうに酔っぱらいや浮浪者がうろついている、一度びっくりしたのは、私の家は当時、商売をやっていたのだが、ある朝、私の父親がガレージから車を出そうとしてエンジンをかけると、車の下から浮浪者がひとりもぞもぞと這い出してきた。どうやら寒いので、夜中に車の下に入り込んで眠り込んでいたのが、エンジンの音で目を覚ましたらしい。「おっさん、どこかへんと死ぬで」と私の父が声をかけると、「うう……」とか唸るような声を出して、出て行ったという。いやあ、なかなかええ話ですな。そうでもないか。

若いお姉ちゃんが歩いていると、かならず酔っぱらいのおっさんにからまれる。ジャンジャン横丁には、昔、「通行中の女性に声をかけるな。浪速警察署」という大きな立て看板が立っていたような記憶がある（今回、行ってみるとすでに看板はなかった）。

もともと明治三十六年の第五回内国勧業博覧会跡地が天王

寺公園になり、その十一年後に通天閣（エッフェル塔と凱旋門を組み合わせる、というコンセプトだったそうである。何考えとんねん）が建設されてできた歓楽街なので、関西でいうと、「万博記念公園」とか「ポートピアランド」とか、まあそういったものだが、だいたい「新何々」という名称のところは、「新しい」というよりは逆に古くさ〜い感じがする場合が多い。できたときは「新」だったんだろうな。新世界もそうだし、神戸にある「新開地」も京都の「新京極」もめっちゃめっちゃレトロな場所である。

「新世界ってどんなところ？」

とたずねられたとき、私はいつも「歴史のない浅草」と答えることにしている。浅草も、新世界と同じく、一時は映画だ芝居だ遊園地だとたいへんなにぎわいをみせた歓楽街だったが、今は落ちぶれはてている。しかし、浅草には浅草寺という歴史的文化財があり、そこだけは江戸時代から相変わらずのにぎわいである。そういうものが新世界にはない。動物園と通天閣とストリップ小屋とづぼらやと串カツ屋とホルモン屋と歌謡ショーがあるだけである。

さて、新世界といえば通天閣だが、今の通天閣は昭和三十一年にできた二代目である。ということは、私の生まれたころは、まだまだ新品同様だったはずなのだが、どう思い出しでも、「ずっと汚らしかつた」という記憶しかない。こないだ、ほんまにめっちゃめっちゃ久方ぶりに通天閣にのぼったが、たしか十五年ぐらいまえまでは、「エレベーターのドアを手であけていた」のである。こないだ行ったときは、さすがに自動ドアに変わっていた。うえにはビリケンさんが祀られているが、映画のタイトルにまでなった、見かけは悪魔みたいなこのビリケンさんというのは何かというと、アメリカのある女性彫刻家が夢に見た神さまを彫刻にしたら、（理由はさっぱり

わからないが）世界的な大ブームになったのである。ピリケンともいうが、英語表記を見ると、ビリケンが正しいようである。

通天閣の真下には、「餃子の王将」があつて、この店には私の友人のYが体験した興味深いエピソードがあるので紹介したい。かなりまえのことだが、Yがこの店に入り、海老の天ぷらとビールを注文した。できあがってきた海老の天ぷらを一口食べると、どう考えても「腐っている」としか思えない味がしたので、いくらなんでも文句を言おうと、目の前にいる店員に向かって声をかけようとしたとき、そのすぐ横で、店長らしき人物がバイトらしき青年をいきなり鉄拳で殴り飛ばした。青年は吹っ飛んで倒れ、Yは言いかけた文句をぐつと飲み込んで、金を払ってその店をあとにしたという。いやあ、なかなかええ話ですな。そうでもないか。

「王将」のすぐ横には、地下に潜る入り口があつて、この下に「ふたりっ子」でおなじみの「新世界歌謡劇場」がある。ふだんは将棋・囲碁センターだが、週末や祝日だけ歌謡ショーが催されるのである。しかし、ここが昔は「水族館」だったことを知るひとは少ない。ええ、そうなんですよ、水族館だったのです。それはそれはすごい水族館だった。変な絵看板が掲げられていて、海遊館にも負けない設備と魚の種類。えーと、金魚がいたっけな。あと、鯉とか。子供ごころにも、「しょぼい」

と思ひました。熱帯魚屋の店先のほうがまだましな感じだったし、あまりに暗く、じめじめしていて、「こんなところ、誰が入るねん」と思っていると、やはり潰れました。

通天閣を通り過ぎると、ジャンジャン横丁がある。ここを抜けると、飛田である。飛田という名前を聞くと、関西の男

性はにやりとするが、昔はたいへん栄えた遊郭街であるが、今でもその手の店が並んでいて、まあこれ以上書くと「ラクゴ・ザ・フューチャー」が発禁になるからやめておく。その遊郭の呼び込みがジャンジャンと三味線を弾いたのが、横丁の名前の起こりである。

ジャンジャン横丁の入り口には、以前は「温泉劇場」という演芸場があり、梅田花月やなんば花月に比べると格落ちだが、若手の登竜門として、また、古くからやってる売れない芸人のいぶし銀の芸を見られる場所として機能していた。今、人気のある芸人さんたちも、思い出話として、「新世界の温泉劇場に出て……」というエピソードを語ることがある。私も、劇場のまえはよく通ったが、中に入ったことがないので、何ともいえないが、それほど変わった場所ではなかったように思う。「温泉、普通」ということですな（わかりにくい？）。

ジャンジャン横丁は、二度づけお断りで有名な串カツ屋とか、ホルモン屋、どて焼き屋など、D級グルメの宝庫だが、こないだ入った店をご紹介します。名前は忘れた。というか、子供のころから、その店の名前が何というのか知らないのがある。たぶん十年ぶりぐらいに入ったが、まったく変わっていない。「シチュウー」というのが名物である。「シチュウー」ではない。「シチュウー」である。いわゆるクリームシチュウーとかビーフシチュウを想像するとまちがいである。なにしろ、「シチュウー」のほかに、「シチュウーうどん」とか「シチュウーもち」といったメニューがあるのだ。この「シチュウー」は、ようするに、ちよつとトロつとした野菜スープみたいなやつで、「シチュウーうどん」はそれに柔らかくて腰のないうどんが、「シチュウーもち」はそれにお餅が入っているのだ。今回は、「シチュウーうどん」を注文し、ビールを飲みながら食べると、懐かしさも手伝って、とてもとても

おいしかった。この、「うどんに腰がない」というのは、大阪のうどんの特徴だと思う。最近でこそ、讃岐うどんブームで、「うどんに腰がないなんて、クリップをいれない紅茶みたいなもの」という認識が広まっているが、昔は、大阪のそのへんのうどん屋で食べるうどんには腰はなかった。だいたい、自分のところで麺を打ったりしている店はほとんどなく、だいたい製麺所で仕入れ、それをくたくた煮るので、最初は少しはあった「腰」が消滅するのだ。今回、「シチュウーうどん」のうどんは、まさにそれで、箸でつかもうとすると、途中でぶつっと切れるようなやつで、

「これこれ、これですがな」

と感激して食べた。

このあたりの店は、知り合いが通りがかると、「うどんを茹でていかないか」と声をかけるのが一種の挨拶になっているらしく、あちこちで、

「うどん炊いてき」

「うどん炊いてき」

と言われたが、もちろんそんな誘いにいちいち応じていたら、身ぐるみはがれてしまう可能性がある。うどん炊いてき、ではなくて、油断大敵なのである。

てな感じで、わがふるさとである新世界についてあれこれご紹介してきたが、そろそろ紙数が尽きてきたので、次回はこの続きをお送りしたいと思う。ではっ。

了